中日新聞　令和６年２月２日付　掲載

過疎地の災害医療
薬品供給に備えを

岐阜薬科大・林教授

石川県珠洲市で、能登半島地震の発生1週間後から岐阜県薬剤師会からの派遣で支援活動をした岐阜薬科大（岐阜市）の林秀樹教授＝写真＝が本紙のインタビューに応じた。同大の災害対策医薬品供給室両「モバイルファーマシー（MP）」で医薬品を届けた。林教授は「高齢者の多い過疎地という点で、岐阜でも能登と似た状況は起こり得る」と対策の必要性を訴える。

（聞き手・井上京佳）

―1月7日から14日までの現地での活動は

珠洲市健康増進センターの保健医療福祉調整本部で、薬の供給体制を整えた。MPで避難所を巡回し、医師の診療を受けた人に、車内で調剤した薬を渡して服薬指導した。

―薬の供給状況は

金沢市の石川県薬剤師会と県内の薬品卸業から供給された。最初は道路の被害や指揮系統の混乱で、調達まで3日ほどかかった。10日ごろには、発注して翌日に届くようになった。

―薬科大のMPは初めて災害現場に出動した

期間中に約250枚の処方箋を受け付けた。家が倒壊し、薬を持ち出せなかった糖尿病患者にインスリン注射を渡すなど、命に関わる処方もあった。嚥下障害の人に錠剤を粉末にし、一度に飲む薬をまとめるなど飲みやすく工夫もした。

―過疎地域での災害の課題は

高齢化で持病がある人が多いが、薬局が少ない。医薬品供給や薬剤師の活動を指揮する地元の薬剤師がいない地域もあった。岐阜も飛騨や東濃地域などでは、薬剤師の少ない地域がある。指揮役となる「災害薬事コーディネーター」を育成する必要がある。

―岐阜県薬剤師会によると2月末までに県内40―50人の薬剤師を派遣する

薬の調剤だけでなく、保健師と避難所で健康相談に乗っていると聞く。避難所での感染症を防ぐために、空気中の二酸化炭素（CO_2）濃度を測って換気を促したり、消毒液の使い方の指導もできる。

今回多くの薬剤師が派遣された。県薬剤師会の防災担当としても、新年度から研修などに力を入れたい。

石川県内外から医療関係者が集まり、被災者への医療提供に取り組む保健医療福祉調整本部＝同県珠洲市健康増進センターで（林教授提供）